

マクロ経済学第二 (工学院経営工学系, 開講クォーター: 4Q)

第 8 回: 中期のマクロ経済分析: AS-AD モデル 後半

大土井 涼二

2017 年 1 月 6 日

前回までのおさらい

- 「中期」の均衡を分析 (テキストでいえば 11 章後半)
⇒ 分析するモデルを AS-AD モデルという.
- 「中期」とはどのような仮定なのか?
 - ① 物価水準が伸縮的
 - ② 資本ストックは固定, 労働投入は市場の需給均衡条件を通して変動(*) IS-LM モデルでは, 物価が固定 ($\Leftrightarrow$ 短期の仮定)
- なぜこのような仮定に立脚した分析が必要か?
 - ① 現実社会では, GDP と同様に物価水準も常に変化している.
 - ② 政府も中央銀行も, GDP と物価の双方の動きを見ながら政策を立案

講義計画

- (済) 12 月 20 日 : 中期のマクロ経済分析 前半

- ① AD・AS 両曲線の導出

- ② 均衡の描写

- 1 月 6 日 (本日): 中期のマクロ経済分析 後半

(順不同)

- ① 「GDP の変動」と「物価の変動」がどう関連しているかの解説

- ② 財政・金融政策が均衡 GDP と物価水準に与える効果の分析

- 1/10 日 (火): 景気変動に関するその他の経済変数・概念を紹介

AS-AD モデルのおさらい

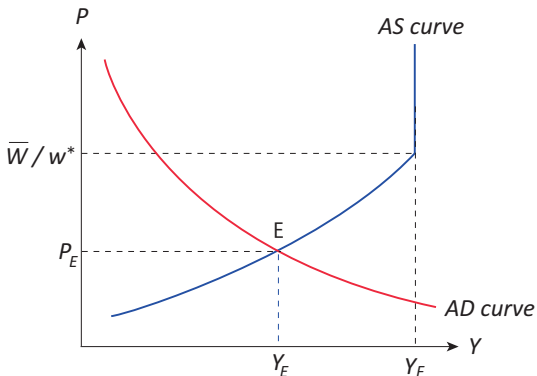
- AD 曲線とは? $\Rightarrow$ IS-LM モデルから得られる物価水準と GDP の関係
 - ① いま物価水準が上昇したとする $\Rightarrow$ 実質貨幣供給が減少
 - $\downarrow$
 - ② 利子率上昇 $\Rightarrow$ 投資が減少
 - $\downarrow$
 - ③ 総需要が減少
- AS 曲線とは? $\Rightarrow$ 企業の最適化行動と 労働市場均衡 から得られる物価水準と GDP の関係

下線部に関して, どのような市場を考えるかで複数の導出方法が存在

$\Rightarrow$ この講義では「名目賃金率の下方硬直性」による導出を採用

AS-AD モデルのおさらい

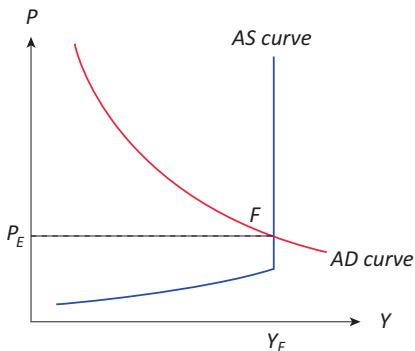
- 以上より, 中期の均衡は下図の点 $E(Y_E, P_E)$ で決定される.



- 以降は, このように「 AS 曲線の右上がりの部分」と交わって決まる均衡を中期の均衡と呼ぶ.

AS-AD モデルのおさらい

- 下方硬直性が緩和していくと, 前述のように AS 曲線は垂直化
⇒ いずれ均衡は点 F となり, 完全雇用における GDP (Y_F) が実現



- 以降は, このような均衡を完全雇用均衡と呼ぶことにする.

賃金率の決定

- 均衡が点 E で決まる場合 ($\Leftrightarrow$ 中期均衡)



- 図示すると... (講義中に解説)

$$w = W/P$$

 LS, LD

賃金率の決定

- 均衡が点 F で決まる場合 ($\Leftrightarrow$ 完全雇用均衡)



- 図示すると... (講義中に解説)

$$w = W/P$$

 LS, LD

AS-AD モデルの利点・その1

GDP (Y) と 物価水準 (P) がともにモデルから決定される内生変数となっているので...

利点その1

両者の変動の関連性を理論的に把握することができる.



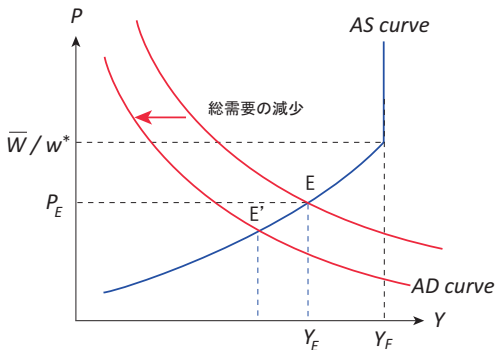
では, 変動は何によって起こるのか?

- ① AD 曲線のシフト
- ② AS 曲線のシフト

(*) AD, AS 曲線のシフトを起こす外的要因を, それぞれ需要ショック, 供給ショックという.

需要ショックによる AD 曲線の変動

- いま, 経済が中期の均衡 E にある状態で, AD 曲線が左側にシフトしたとする.



- GDP は減少. 同時に, 物価水準は下落

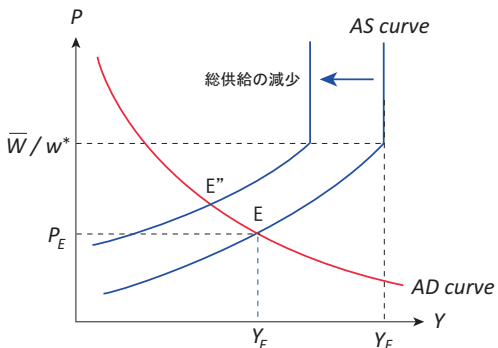
需要ショックと物価変動

- 一般に, 総需要が増加し続ける事によって発生するインフレーションを**ディマンドプルインフレ**という.
- 前のスライドではこの逆が起きている.

⇒ 「不景気が続くとデフレが発生」という減少に対する一つの理論的説明

供給ショックによる AS 曲線の変動

- いま, 経済が中期の均衡 E にある状態で, AS 曲線が左側にシフトしたとする.



- GDP は減少・同時に, 物価水準は上昇

供給ショックと物価変動

- 一般に, 総供給が減少し続ける事によって発生するインフレーションを**コストプッシュインフレ**という.
- このとき, 均衡 GDP は減少しつつも, 物価は上昇し続ける. このような現象を**スタグフレーション**という.

AS-AD モデルの利点・その2

利点その2

財政・金融の各政策を分析する際に,

- ① GDP だけでなく物価に対する影響も分析することができる.
- ② 政策の効果が, タイムスパンの変化 (中期 → 完全雇用) によって異なってくることを理解できる.

AD 曲線を構成する方程式:

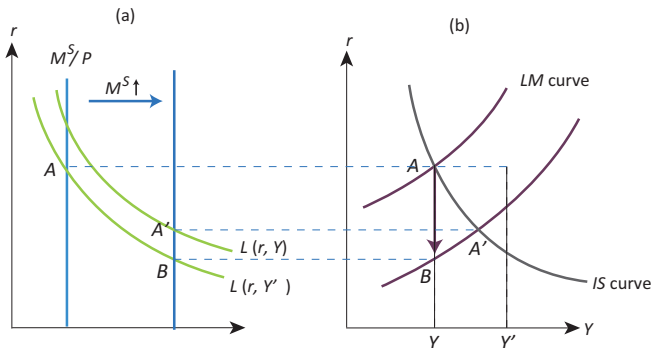
$$Y = C(Y - T) + I(r) + G$$
$$M^s/P = L(r, Y)$$

財政政策の効果

課題で考えてもらう.

金融政策の効果

- いま, 中央銀行が名目貨幣ストック M^s を増加させたとする.
- 総需要の変化



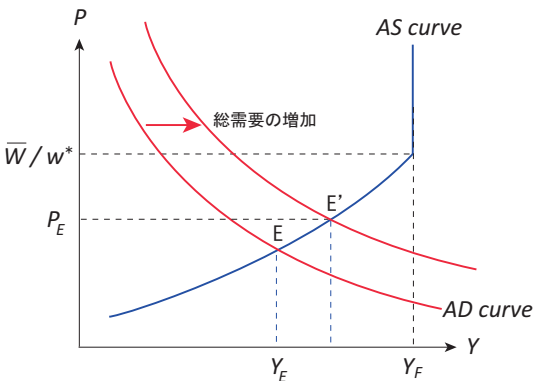
(*) 描画手順は講義中に解説

- すなわち, 金融緩和は AD 曲線を右方シフト

ケース (1): もともとの均衡が中期均衡のとき

- すなわち, 金融緩和は AD 曲線を右方シフト

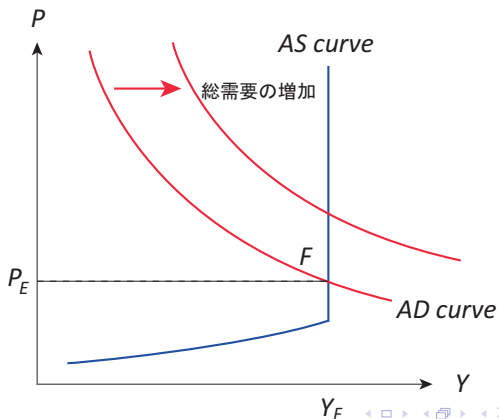
⇒ ケース (1): もともと中期均衡にいた場合..



ケース (2): もとからの均衡が完全雇用均衡のとき

- すなわち, 金融緩和は AD 曲線を右方シフト

⇒ ケース (2): 経済がすでに完全雇用を達成していると...



金融政策の効果

- 以上より, 中央銀行による金融緩和は

- ① 元の均衡が中期均衡の場合, 物価水準の低位推移を解消し, GDP を押し上げる効果

⇒ 中期均衡では失業が発生しているので, 金融緩和は失業対策としても機能

- ② 元の均衡が完全雇用均衡の場合, 物価水準を上昇させる効果しか持たない.

⇒ これを**貨幣の中立性** (neutrality of money) という.

貨幣の中立性

名目貨幣供給の変化が, 実質 GDP や同消費・投資などの実質変数に影響を与えず, 物価水準などの名目変数にしか変化をもたらさないことを貨幣の中立性という.